

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

——モダリテイ形式「ゲナ」の成立再考——

山 本 佐 和 子

一 問題の所在

室町期の抄物資料で、活用語の終止連体形に後接して推量を表す「ゲナ」が広く用いられることは、湯沢（一九二九）で指摘されて以来、多くの研究がなされてきた（土井一九三八、佐田一九七二、仙波一九七六、青木博二〇〇七、山田二〇一〇など）。

(1) a. ヤレ杜鵑ハ吾ガ心中ヲ知テ不如婦トナクゲナヨ

（中華若木詩抄・上42ウ・湯沢一九二九）

b. 爰ニ白鷗ヤ鷺ヤナンドガ有ウズ処デアルガ、人近ナホドニ
ナイゲナゾ

（丁亥版山谷抄・一四35ウ・山田二〇一〇）

c. 言語道断、面白景ソ。推量スルニ、是ハ天カ我ニ詩ヲツク
ラセウトテ、カウアルケナソ。

（四河入海・九ノ一5ウ）

これらの「ゲナ」が表す「推量」について、先行研究では、「述

べられる事物を主として客観的に言えば状態、（中略）主観的には推量の意を示す」（湯沢、三六六頁）、「確かな根拠に基づく推量」（仙波一九七六）などと説明されている。

詳しくみてみると、(1) a では「ゲナ」が付く動詞が表す「杜鵑（ホトトギス）」の鳴く声を作者は既に聞いており、(1) b 「白鷗や鷺などがいない」、(1) c 「景色がこうある」も明らかな事実である。

「…ゲナ」は波線を付した、それらの事柄の理由や原因についての推量を表しているようにみえる。当期の「ゲナ」は、モダリテイ研究で「本体把握」「内実推定・原因推定」と呼ばれる意味を表すと思われる。

モダリテイ形式「ゲナ」についての先行研究の多くは、「ゲナ」に伝聞の意味が生じる近世前期を対象とする。本稿では、室町期の「ゲナ」がなぜ右のような意味・用法なのかを、元になったとされ

る形容動詞派生接辞「〜ゲナリ」の史的变化との関わりから考えてみたい。

二 モダリテイの先行研究——「本体把握」・「推定」

室町期の抄物における意味・用法の検討に入る前に、モダリテイに関する先行研究を確認しておきたい。

現代語のモダリテイ形式は、意味や文法的振る舞いの差から、「ダロウ」と、それ以外の「ラシイ」「ヨウダ」「ミタイダ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」等に大きく二分できることが知られている。

意味では、「ダロウ」は、「ダ」やモダリテイ形式が付かない言い切りの文と並ぶもので、「判断肯定性の分化」(野村二〇〇三)、「叙実法」(大鹿一九九三・二〇〇四)等といわれ、ある事柄・事態を事実として想定することを表すとされる。一方、「ラシイ」等は、事柄・事態が話者の判断を離れても成り立つものであり、その事柄・事態が何らかの「前ぶれ、しるし、気配、痕跡」(奥田一九八九)等によって捉えられていることを表すという。文法的振る舞いとして、否定はどちらも不可能だが、「ダロウ」のほうは、疑問文(「〜だろうか」)にできるといふ差も注目されている(森山一九九二)。

現代語の「ラシイ」や「ヨウダ」「ミタイダ」が表す、右のような客観的な対象に対する主観的な捉え方は、「本体把握」や「推定(内実推定・原因推定)」と説明されている。

「本体把握」は、大鹿(一九九五)が「ラシイ」について指摘するもので、「ラシイ」は、「所与の事態からその背後にある、全体としての事態を把握している」といった意味を表すという。

(2) a. (呼び出し音を十回以上鳴らし続けても、電話に出ないという情況) 所与) どうも留守らしい。

b. 会議が終わったらしい。資料を抱えた数人のメンバーが談笑しながら、出てきた。(a, bとも、大鹿論文)

右の意味から、「ラシイ」が使われる情況は、その情況が「:らしい」と判断される内容の帰結や結果になっている場合が多いという。大鹿論文では、この意味関係が次のような表で整理されている。

判断の根拠	判断の内容
帰結・結果	理由・原因
資料を抱えた数人のメンバーが談笑しながら出てきた	会議が終わった

「:らしい」が表す判断の内容は、所与の事態の理由・原因となる。ただし、原因・理由といった意味は、「ラシイ」が本体把握を表すために読み取られるもので、「ラシイ」が表す意味ではない。こ

のことは、殆どの例で「ノダロウ」と言換え可能だが、判断の根拠、痕跡がない状況では、「ラシイ」が不自然になることから分かるという。

- (3) (定例となっていない飲み会にいつも来る人が来なかったので、家に帰ってからその理由を考えたという状況で) 家の方で、よんどころない用事があったのだから／＊らしい

また、近世江戸語の「ヨウダ」「ソウダ」を扱った岡部(二〇一)では、大鹿の「本体把握」に当たる意味を「推定」とし、「現在話し手が認識している状況の背後の事情を推定する」と定義する。「推定」はさらに、話し手が現在把握している状況の内実を推定する「内実推定」、話し手が現在把握している状況をもたらしただ過去の出来事を推定する「原因推定」に二分でき、現代語「ヨウダ」が両方を表すのに対し、江戸語「ヨウダ」は「内実推定」のみを表すという。

- (4) a. (外からザーという音がするのを聞いて) 外では雨が降っているようだ。(内実推定)
 b. (免許を持っていないはずの友人が車を運転しているのを見て) 春休みの間に教習所に通ったようだ。(原因推定)
 c. 松次郎は眼を覚し、「何だか大分【時刻ガ】おそい様だの」

(人情本・花筐・岡部二〇一一)

以上の「本体把握」・「推定」の説明を踏まえて、抄物の「ゲナ」の用い方を見ていくことにする。

三 抄物における意味・用法

三―一 形態的特徴

まず、「ゲナ」の形態的特徴を確認する。

モダリテイ形式「ゲナ」は、形容動詞派生接辞「〜ゲナリ」から生じたものである(以下、モダリテイ形式を「ゲナ」、接辞を「〜ゲナリ」と表示)。接辞「〜ゲナリ」は、主にク活用・シク活用形容詞から形容動詞を派生する接辞で、平安期の、特に和文で高い生産性を示すが、中世になると新たな語は派生されにくくなる(青木玲一九八〇)^③。抄物では、「をかしげな(身分が低くて取るに足らない)」など、多用される語は一部に留まる。

- (5) a. 言ハ、カ、ルヲカシケナル小家ノ平百姓ソ。(史記桃源抄・四63ウ)

- b. 暴雨ヲアリくトツクランタメニ、モノヲソロシケニ先ツ第一第二第三等ヲ設也。(四河入海・七ノ一24オ)

派生接辞とモダリテイ形式の差として、形容動詞には当然ながら、(5) a のような連体用法や、(5) b のような連用用法が見られるのに対し、モダリテイ形式「ゲナ」は殆ど活用せず、文末用法のみ認めら

れる。「ゲナ」が活用するのは、丁寧語「候」が後接した「ゲニ候」と、原因・理由を表す従属節となる場合の「…ゲデ」に限られる。^④

(6) a. 【蕪麻】—【如之何】 麻ヲウユルハイカニモ熱地ヲエラウテ
ウユルケニ候。七反ホリカヘストヤラ云ソ。
(毛詩抄・五9才)

b. 【有美】—【一人。碩大且卷】 碩大ト云ハタケタカイヲ云ソ。
ヒキイハミタムナイケニ候。タケタカイヲ美人ト云タ程ニソ。
(毛詩抄・七14ウ)

(7) a. 【飄】—【蕭紙窓明】 雪ヲハ未見トモ何サマフルケテ、窓カ
明ニナルソ。
(四河入海・七ノ一6ウ)

b. 【漸】—【聞鐘磬音】 漸ク高峯ノ塔ニチカイケテ、鐘磬ノ
ヒ、キカスルソ。
(四河入海・六ノ一14才)

当期の形容動詞連用形は、通常の連用修飾では「ニ」、並列・中止法で「デ」となる(土井一九三八、坪井一九八二)^⑦。山田(二〇〇一)では、形容動詞の「デ」形は概ね「であつて」の意味で、次に続く事柄の原因・理由・根拠を表していると指摘される。

(8) a. 南方ハアタ、テ、梅カ多テ実カナルソ

(玉塵抄・二二36ウ)

b. 酒カノミタクトモサカテノ銭カ貧テアルマイソ

(玉塵抄・三八6ウ・山田二〇〇一)

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

「貧(ひん)な、貧に」は、貧乏を表して当期よく用いられる語で、(8) bは、「貧乏で、(酒手が)あるはずもない」といった内容である。

(7)のモダリティ形式「…ゲデ」の例でも「雪が降るよう、窓が明るくなった」、「塔に近いよう、鐘の音が響く」のように、「…ゲデ」が表す事態が、後に続く部分が表す事態と理由・原因の関係になつている。「ゲデ」は、「…ゲナ」が表す判断が理由・原因となることを示すと共に、形容動詞派生接辞と「ゲナ」の近さを窺わせる。

さらに、抄物では、「ゲナ」は原則、活用語の終止連体形に後接するが、存在詞「ある」と、これを用いた文法形式——繫辞「デアル」、アスベクト「テアル」や敬語「オアル」では、連用形に付く「〜アリゲナ」の形が認められる。^⑧

(9) a. 【何処】—【鶯鳴切】 移【時独未休】ニ義アリ。尚モ面白処
カアルケナヨ。余ノ鶯ハ鳴キヤムニ云々也。或：君子在レトモ
此、小人ノ心ニ面白人ヲハ不トモ賞翫、独声取スマイテ啼テ
居タ者アリケナ。
(杜詩統翠抄・九25ウ)

b. 此淵ニハ神竜モアリケテ、水ノトハシリ如電ニシテ昼モク
ヲキノ。
(四河入海・七ノ四6ウ)

c. 【九門】 タイリノ門ハ重々ニ九エアリケナソ。

(玉塵抄・二二89才)

(10) a. 爵ヲ云モアリ、氏ヲ云モアリ、…馮敬—ト姓名ヲ云モアル

ソ。此ハ其時ノ云ツケテアリケナソ。

(史記桃源抄・四12ウ)

b. 三十卷ハカリ有物チヤケニ候。面白物テアリケニ候ソ。
(漢書列伝竺桃抄・41ウ)

b. 席ハハイテトモ、ケツルトモ、ナツルトモ、ハツ、テトモ
云ソ。…ハツ、テト云カヨケニ候。
(蒙求抄・542オ)

(蒙求抄・235ウ)

(参考) 是ハ鄭玄カ、ヨイケナソ。

(毛詩抄・36ウ)

c. 今ヨリ以後花チリテ実カナリテ、子モチカ母ニナリテ衰ス
ル事ヲ人ニ見セジトテ、サテ風カ吹折テアリケナト坡意ナ
ラハ推シテアルト云ソ。
(四河入海・十四ノ三21ウ)

d. (野人留我宿) サテ有情ノ野人モ李氏ノ知音テ、其跡ヲ
〔坡が〕御尋アリケナト云テ留我宿セシムルソ。

(四河入海・三ノ二26ウ)

このように、「ある」や「である」「ではない」、話者の判断・評
価を表す「よい」で、接辞とモダリティ形式とが近似する点は、モ
ダリティ形式の発生を考えるうえで注意される。

(9) が存在動詞、(10) が「デアル」などの例である。(9) a や (10) b のよ
うに、「アルゲナ」や「ヂヤゲナ」と連続して使われる例が複数あ
り、「連用形+ゲナ」と「終止連体形+ゲナ」とで意味・用法に明
らかな違いはない。他にも、「デハナイ」、形容詞「よい(良)」で、
「語幹+ゲナ」と「終止連体形+ゲナ」とが同じように用いられて
いる。

(11) 辺伯ト云ハ別シテ人名テハナケナソ。(史記桃源抄・2105ウ)

(参考) 周公ノ解夢書ト云カアルソ。其テモナイケニ候。

(毛詩抄・一一15オ)

(12) a. 此ハ古本ノ、趙ト云字ノナウテ伐ハ作代タカ、ヨケナソ。

近く、抄物の「ゲナ」の意味を考察した、山田(二〇一〇)は、
数多くの抄物の用例を博搜し、特徴的な構文を見出されているが、
意味については、大きく分けて「根拠のある推定」「断定の和らげ」
す。

三二二 「ゲナ」の意味

抄物の「ゲナ」について、今のところ、現代語「ラシイ」等と同
じく否定文や疑問文の例は見出していない(調査範囲は稿末に示
す)。

の二つを表すとされている。「断定の和らげ」は、現代語「ダロウ」についてしばしば指摘される意味で、これについては、「ダロウ」が推量を表すためにそのような使い方が可能になるもので、「ダロウ」という形式の意味ではないという指摘がある（奥田一九八四・一九八五、大鹿一九九三）。

また、「根拠」は「ゲナ」について多くの先行研究が指摘するが、規定が曖昧である。例えば、次の例では、「舟人ドモガ高声ヲシタソ」が「根拠」とされる。

(13) 夜ニナリテ舟中ニ臥シテ居タレバ、舟人ドモガ高声ヲシタソ。

盧縮ガ意ニ、潮ガ生ジタルニ依テ、ナニト舟ヲイタサンカ日波
ハイカ、アルベキナト、談合スルゲナト推量シタソ。

（丁丑版三体詩抄・二二二12オ）

「舟人どもが声高に話し合っている」事態は、確かに「話者が事実として確認していること」（山田論文の「根拠」）であるが、その事態についての「潮が生じたので舟を出そうか話し合っているゲナ」という判断は、論理的な必然性があるものではない。舟人が大声を出しているのは、酒盛りをしたり、客を誘っているのかもしれない。「：ゲナ」が表すのは、「ラシイ」等と同じく、「所与の事態からその背後にある、全体としての事態を把握している」、「推定」といわれる所与に対する判断で、「私は、その事柄は凡そ…のようなものだ

と把握している」といった意味だと考えられる。

抄物における「ゲナ」の文末用法には、(一)抄物の作成者（講者・抄者）の判断を表すものと、(二)文中の登場人物（漢詩文の作者も含む）の判断を表すものがある¹⁰。ここまで挙げた例では、

(一) が(6) a・b、(9) c、(10) a・b、(11)、(12) a・b、(二) が(7) a・b、(9) a・b、(10) c・d、(13)である。

(二)の抄物の作成者の判断を表す場合は、「〔原典の語句〕ハ：ゲナ」という、単純な構文が多くなる。次は、原典の用字・本文を示し、作成者が現状そうなっている理由を「：ゲナ」で述べている。

(14) a. 出ハ、幽字カ損シタケナソ。 (史記桃源抄・二92オ)

b. 為將軍ト云三字モ此ニハナイソ。脱落シタケナソ。

（史記桃源抄・七26ウ）

これらは、現状の「出」字・「為將軍」がない本文（Ⅱ所与）から、本来はそうなっているはずの「幽」字・「為將軍」の三字がある本文（Ⅱ本体）を把握していることを表していると考えられる。

漢籍の注釈という性格上、「：ゲナ」を、原典で言及される人や物品が、具体的にどのようなかを説明する場合に用いた例が多い。

(15) a. 侍読学士ト云ハ天子ニモノヲヨミテキカセ申ス官ソ。是ハ
文字読ヲスルケナソ。侍講学士ト云モアルカ、其ハ談義ヲス

ルケナソ。(四河入海・一ノ一三ウ)

b. 獨鼓ハ獨ハ北ノエヒスノ名ソ。エヒスノモツ鼓チヤケナソ。

(玉塵抄・二二54オ・山田二〇一〇)

一見、語義のシンプルな説明で、なぜ「ゲナ」が用いられるのか分からぬ。しかし、(15 a)で「侍説・学士」と「侍講・学士」の違いを「読む者のようだ」「談義をする者のようだ」と説明しているように、「ゲナ」は、「侍(読/講) 学士」「獨鼓」(≡所与)がそう称される理由を、抄物の作成者は、「ゲナ」の前後部分が表す、具体的な役割や用途(≡本体)だと把握していることを表すものと考えられる。

次のように作成者の把握が表立つと、「(銅の剣とは) 銅も唐のもの頑丈なのだろう」といった憶測に近い説明を表すことになる。

(16 a. 【古銅―(劍)】銅モ唐土ノハ、シヤウカツヨイケナソ。

(四河入海・十一ノ三23ウ・湯沢一九二九)

b. 【台笠緋撮】緋ハクロイ布テシタ頭巾ソ。撮ハ一ツマミ斗

事ソ。其頭巾ニ髪ヲ治メテ〔笠を〕ラクケナソ。

(毛詩抄・二五11オ)

(二)の、「ゲナ」が漢詩等の解釈(口語訳)の中で用いられて、文中の登場人物の判断を表す場合は、意味関係は少し複雑になる。

(17 a. 【春―雨闇く塞峡中】早―【晚来自楚王宮】トコカラ

フリ始ツラウ、鞍馬方カラフツテ来タケナ也。【乱】波分披已打岸】雨水大四条ノ橋サウナ。

(杜詩統翠抄・十六22ウ)

b. 【蜜蜂―採花作黄蠟】言ハ、サテ此花ハナントシタレハ黄色ナルソト云ヘハ、所詮蜂カ花薬ヲトリテ蠟ヲツクリテヲイタヲ天公カ其蠟ヲ取テ花ヲツクルケナソ。

(四河入海・一四ノ三33オ)

c. 【知我―者、謂我心憂】：我心ヲヨウ知タモノハ、^{ウチモトツ}彷徨テイラル、ハ心ノウレヘカアルケナト云ソ。【不知―我者、謂我何求】知ラヌモノハ物ヲ落テソレヲ尋ラル、ケ

ナナド云ソ。(毛詩抄・四3オ)

例えば、(17 a)は、原文を離れた意識で、「(雨水が押し寄せる)どこから降り始めたのだろう、鞍馬のほうから降って来たようだ」らしい。：雨水が四条の橋を(？覆い)「そうだ」といった内容で、破線部の話者にとって所与の事態(雨水が岸を打つ/蠟梅が黄色い/作者が彷徨している)について、理由・原因となるような別の事態(山中で降った/天公が蜜蜂で作った/心に憂いがある・探し物をする)を思い描くことを表している。(17 a, b)は、二つの事態間に時間差があり、「ゲナ」は「原因推定」も表すことができると考えられる。

以上の「…ゲナ」が表す判断と、前後の文脈で示される内容との意味関係を、大鹿（一九九五）の「ラシイ」にならって表に示す。

判断の根拠		判断の内容	
帰結・結果		理由・原因	
(14a) 本文「出」 (15a) 侍読学士	(14a) 幽字が損なわれた (15a) 文字読をする	(18c) 「心ノウレヘカアル」	(18a) 鞍馬の方から降つて来た
(18a) 雨水が川岸を打つ (18c) 「彷徨テイラルル」			

三二二 特徴的な構文

抄物には、所謂「主題ハ」解説」型の構文のほか、「ゲナ」の意味的特徴を示すような構文も見られる。山田（二〇一〇）も指摘するように、抄物「ゲナ」は「ホドニ」節を受ける例が多い。

- (18) a. 此四篇カ文体カヨウ似タ程ニ、一人ノ作チャケナト申タ事ソ。
 (毛詩抄・二二18ウ)
- b. 叡山ノ高処ニ貝ノカラガアルト云ホトニ、叡山ノ頂マテ海水ガアリタゲナソ。

（日本書紀桃源抄・中2オ・山田二〇一〇）
 多くの例で「…ホドニ」は、「…ゲナ」が表す判断の根拠となる、話者にとって所与の事柄・事態を表す。注意されるのが、「…ゲナ」

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

に前接する動詞句が表す事柄・事態は所与のもので、「…ゲナ」が表す判断が、「…ホドニ」である例が見られることである。

- (19) a. 始ニ景王立ト云テカラハ、別シテ景王景王トタヒコトニ不出トモノレトモ、此本紀ニハタヒくニ出タソ。此ハ「二王ノ事カサノミ多モノウテチツくアルホトニ、名ヲ不_レ言_レハマキル、ホトニカ如是シルイタ」ケナゾ。

（史記桃源抄・二121オ）

- b. 臘月ニ開ク花ハ梅デナフテハ何デアラフゾ。「北人チャヤホドニ何ノ木ゾト云タ」ゲナソ。

（丁丑版三体詩抄・一三14ウ）

- c. 此行甫ハ「僧ニテアルホトニカウユワレタ」ケナト也

（龍門文庫本江湖風月集抄・地5オ・a, b 山田二〇一〇）
 これらでは、「ゲナ」の前接部分が「…ホドニ」節も含めて「ゲナ」のスコープ（「」で表示）に入ること、文中の焦点（フォーカス）が「…ホドニ」節に移っていると考えられる（冒頭(1)の各例、参照）。

現代語のノダ文、古典語の連体ナリ構文の分析で示されるように、このような焦点の変更は名詞化された節の中で起こる（野田一九九七、金水二〇一一）。「ゲナ」の前接部分は名詞節（準体句）になっている可能性がある。抄物では、次のような例も見られる。

- (20) a. 今冬日ニ花ヲ開カスルハ、チツトモ牡丹ヲヤホリヲカシト
テサカスルケナソ。
(四河入海・十四ノ一 16ウ)
- b. 文王ノ姜里ヘハ四レタ時、易六十四卦ヲタ、マレタト云カ、
伏羲ノタ、マレタケナソ。
(史記桃源抄・二52ウ)

四 派生接辞の史的变化

四一 一 モダリテイ形式の成立についての先行説

はじめにも述べたように、「ゲナ」の先行研究の多くは、伝聞の意味の発生を対象とする^①。その中で、青木博(二〇〇七)では接辞からモダリテイ形式への変化が考察され、次のような過程を示される。

- (21) a. 語「〜ゲナリ」。「〜」は形容詞語幹・動詞連用形。ニクゲナリ、アハレゲナリ、アリゲナリ
- b. 名詞句「〜ゲ」+「ナ」。「〜」は活用語連体形、「ナ」は活用する。「モ流ルルゲ」ナ、「モ有ツタゲ」ナ
- c. 文「〜」+「ゲナ」。「〜」は活用語終止連体形、「ゲナ」は活用しない。「明州ニアル」ゲナ、「モ此ノ心ヂヤ」ゲナ

青木論文では、(a)の段階で、前接動詞が、次の例(22)の「〜」のようにラ格やニ格を伴う動詞句を形成できたことが、モダリテイ形式への変化を引き起こす要因となったと考察されている。

- (22) a. 御返など、「あはれをしり」げに聞えさせかはさんを、いと憂くのみおほゆれば、
(夜の寢覚・卷三)
- b. 御前いとあまた、こと[〜]しうもてないて渡い給さま、いみじう、「心に入り」げなり。
(浜松中納言物語・卷三・a、bとも青木二〇〇七)

この指摘は、抄物の「アリゲナ」の存在や、次にみていくように、中世前期に、「動詞連用形+〜ゲナリ」で前接部分が形態統語的に大きな要素になる変化が観察できるので、首肯できるものと思われる。

問題は、室町期に抄物で観察されるという、(b)の段階である。青木論文では、(b)段階の「ナ」を、「ニ」「デ」「ナ」のように活用することを根拠に繫辞とし、「ゲ」を「様子」という意味を表す形式名詞と見る。しかし、当期の口語の繫辞は既に「ナリ」ではなく、「デアル」デア・ヂヤ」で、右の活用は形容動詞に等しい。この時期に、「〜ゲ」+「ナ」のような異分析が起きるとは考えにくい。

また、抄物の「ゲナ」に観察された次の二点のうち、(ア)は(a)と(c)の連続性を、(イ)は(c)段階の前に、「ゲナ」が名詞節(準体句)に付く段階を考えたほうがよいことを示すものと思われる。

(ア) 存在動詞「アル」や繫辞「デアル」、評価を表す形容詞「よい」に「ゲナ」が後接する場合、「活用語連用形、形容詞語幹

「ゲナ」と、「終止・連体形+ゲナ」とで意味・用法に差がない。

(イ) 抄物では、「ゲナ」の前接部分で焦点の分布が変更される例が観察できることから、「ゲナ」の前接部分が名詞節(準体句)になっている可能性が高い。

室町期にモダリティ形式の用法が生じる直前、中世前期の接辞「ゲナリ」にどのような変化が起きたか詳しく見てみる必要がある。

四二 動詞連用形に後接する用法の展開

接辞「ゲナリ」は、平安期の和文で非常に高い生産性を発揮していることが知られている(進藤一九七七、漆谷一九八八、村田二〇〇五)。「源氏物語」では異なり語数が約二五〇語、うち二三〇語がク活用・シク活用形容詞を語基とするという(進藤一九七七)。

(23) a. いと寒げなる女ばら、白き衣の、いひしらず煤けたるに、きたなげなる褶、ひき結びつけたる腰つき、かたくなしげなり。
(源氏物語・末摘花)

b. 「今だに。いと、見ぐるしきを」と、いとわりなく恥づかしげに思したり。
(源氏物語・総角)

「きたなげなり」が「清潔でない」ように見える状態」を表すよう

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

に、形容動詞「ゲナリ」は、「語基形容詞が表す属性・感情」の気配・存在が感知される状態」といった意味を表すと考えられる。¹²⁾

この「ゲナリ」は、異なり語数・述べ語数ともごく少ないものの動詞の連用形に付くことがある(青木博二〇〇二・二〇〇七)。殆どの動詞は一例のみであるのに対し、「ありげなり」は複数例がある。

(24) a. 息も絶えつ、「聞こえまほしげなる事はあり」げなれど、いと苦しげにたゆげなれば
(源氏物語・桐壺)

b. 「暇あり」げなる博士ども召し集めて
(源氏物語・賢木)

c. さるは、それも「かやうのことあり」げにおはすめり。
(宇津保物語・蔵開下)

属性主や感情主の存在を意味に含む形容詞と、動詞「あり」とは意味が重なる。室町期の「アリゲナ」の残存は、一つには、前代から他の動詞に比べ「ありげなり」が多用されたためと考えられる。¹³⁾

院政・鎌倉期には、動詞連用形に後接する「ゲナリ」で、補語が準体句や修飾語を伴った名詞句になるなど、より個別・具体的な事柄を表すようになる。

(25) a. 詠む歌には、「髓脳・打聞などいひておほくあり」げなり。
(梁塵秘抄口伝集・卷十)

b. あまりに「知らぬ歌をも知り」げにするあひだ、なかなか

化頭はれにけるか。

(梁塵秘抄口伝集・卷十)

- c. 但「人ノ能モ、代々ニカハリ」ゲニ侍ハ、コノモシト思テ、イトナナム志モニクカラズコソ侍レ。
(教訓抄・卷八)

さらに、用法でも、修飾用法ではなく、(25)c や次の (26)a のように、条件節の述部に用いられるものが見られるようになる。

- (26) a. 「判官ノ僻事ヲモシ、謀反ヲモ発シ」ゲナラバ、告ヨ」

(延慶本平家物語・六末)

- b. 入道今度ハ事ノ外ニ和ギテ、「ゲニモト思ワレタリ」ゲニテ、
「サテ俊寛、康頼ガ事ハイカニ」

(延慶本平家物語・二本)

- c. 「日来内々御談義候シ事ヲ、景親モレ聞タリ」ゲニ候ゾ。

(延慶本平家物語・二五末)

「ありげなり」と関連して、この時期には助動詞「タリ」に後接する例が出てくる。「〜タリゲ」は、(26)c 「(頼朝と時政が) 内々に談義していることを、平家所縁の人が漏れ聞いた様子ですぞ。」のように、直接知りようのない他者の感情や知覚を、「…と思った様子」「…知った様子」のように表し、「思ふ」に付く例が多い。

- (27) a. はじめの句を申出たるにを、さぶらひける女房達、「おりにあはずと思たり」げにて、わらひ出したりければ

(古今著聞集・五 190)

- b. 「下りし時も、「なか申うけざらむとおもひたり」げにて、
教盛を見候度ごとには涙をながし候しが不便候。」

(覚一本平家物語・三)

この時期の「動詞連用形＋ゲナリ」は、現代語の「連用形＋ウダ」が表す「今にも〜しそうな様子・状態」¹⁴⁾ や、「〜のように見える状態」を表していると考えられる。個別・具体的な事態に使われ、形容詞述語に備わる程度の判断は含まれるが、モダリティには関わらない。次の「(北条は、我が子を) すぐに殺しそうな様子ですか。」のように、疑問文にできるのはそのためであろう。

- (28) 「さて「とくうしなひ」げなるか」とのたまへば

(覚一本平家物語・一一二)

このように、「動詞連用形＋ゲナリ」は個別・具体的な事態の属性を表すことが可能になっており、意味・用法のみでは、「〜ゲナリ」が終止・連体形に後接するようになる理由は説明できない。¹⁵⁾

四・三 名詞・漢語形容動詞語幹への後接

「〜ゲナリ」に前接する活用語が終止・連体形になることと関わりと考えられる現象が、院政・鎌倉期に二つ見られる。ひとつは、次の (29) のような漢語形容動詞の語幹への後接を経て、名詞に直に「〜ゲナリ」が付くようになることである。¹⁶⁾

(29) a. 御気色火急げに見えさせ給ひければ、御室信心をいたして
孔雀経をよませたまふ。(古今著聞集・巻一第五〇話)

b. 驚きてみるに尋常シラシヤクげなる女房なりけり。

(沙石集・巻十末一―一話)

c. 男ヲバ「無慚ゲニ命ヲバ、ナ殺シソ」トテ、山ノ中ナル木
ニ縛付テ通りニケリ。(延慶本平家物語・六本)

意味は、(29) a 「急を要するように(見える)」のように、ク活・シク活形容詞を語基とする場合と同じく、「(語基形容詞が表す属性・感情)の気配・存在が感知される状態」を表しており、漢語形容動詞の増加に伴い生じたものだろう。¹⁷⁾

漢語形容動詞への後接は、次の名詞への後接と連続的である。

(30) a. 左府、御前ニテ「イタクナイソギ(ソ)。只今ハ何事ノア
ランズルゾ。當時マコトニ無勢ゲナリ。」(愚管抄・巻四)

〔参考〕多勢を以て無勢を討は常のこと。(平治物語・上)

b. 尾籠ト云フヲコノアテ字カク無題コトハ也。スクニヲコト
云フモ、無題ナル故ニ暈字ケニ云ヒナシタルナメリ。(塵袋・一34ウ・土井一九三八)

c. アル時、大河ノ岸ニテ例ノ病オコリテ、クツチゲナル程ニ
河エ落入ヌ。(梵舜本沙石集・三一)¹⁸⁾

〔参考〕Cūtchūchi: クツチ(くつち) 癩痢。

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

(邦訳日葡辞書 p. 174)

もうひとつの現象は、「ゲナリ」と対義となる「ゲ(モ)ナシ」で、僅かに活用語の連体形に付いた例が見られることである。

(31) a. 憎いげなく、心の底より打ち笑みて向へる者には

(沙石集・五本一四)

b. ヒンナキヨシヲ云ニナメゲニト云心如何。平ノ字ヲナメゲ
ニトヨメソ。平懐ト云フモ同事歟。「キハ」思ヒマシタル」
ケモナキハ平民ニ准シテ無礼ノ心地ナソ。

(塵袋・一〇31オ)

「ゲ(モ)ナシ」は、平安期から見られる表現で、前接語も「ゲナリ」と共通する。

(32) a. ことに恥づかしげもなき御さまなれど

(源氏物語・若菜上)

b. 「何の心ばせあり」げもなく、さうどき誇りたりしよ。
(源氏物語・夕顔)

意味も「ゲナリ」と対になるような、「(語基形容詞が表す属性)の気配・存在を(少しも)感じさせない状態」を表す。この意味から、助詞「も」を伴って用いられることが多く、「ゲ」の形態的な独立性が「ゲナリ」に比べて強い。そのため、「ゲ」が名詞と捉えられ、早くに前接する活用語が連体形になったと考えられる。

「くゲナリ」が「ゲ」と「ナリ」に分析される可能性があったのは、繫辞「ナリ」が口語に存した中世前期であろう。ただ、同じ時期には、「動詞連用形＋くゲナリ」で、個別・具体的な事態の様子を表すようになっていた。また、名詞に直接付く用法も生じている。

これらの変化が重なった結果、「くゲナリ」に前接する活用語の連体形は、「ゲ」への連体節ではなく、活用語の連体形を述部とする名詞節（準体句）であると捉えられ、「ゲナ」は語を形成する接辞から、文法的な要素へと変化したと考えられる。体言的な要素に付いて述語を作るという点で、抄物の「ゲナ」は派生接辞「くゲナリ」や、繫辞と連続的である^⑨。抄物でも名詞に「ゲナ」が一時的に後接する例が見られ、終止用法ではモダリテイを表しているとも解積できる（山田二〇一〇は、^⑩33cをモダリテイ形式とする）。

⑩33 a. 内心ニ盗人ケニシテ、外相ニ殊勝サウナル体ヲスルハ

（応永二十七年本論語抄・五七オ）

b. 大夫ノ権門ケナ人カ旌竿ヲ立テ衛ノ浚邑ト云処ニ居ラレタ

（毛詩抄・三17オ）

c. 仙人ハ目カヨホウ【四方】ケナソ。方瞳ト云ソ。

（玉塵抄・四〇24オ・山田二〇一〇）

五 まとめと今後の課題

——モダリテイ形式の成立再考

本稿では、室町期の「ゲナ」が「本体把握」（大鹿一九九五）と呼ばれるタイプの判断を表し、一部の例で焦点の変更が見られることから、変化の過程で名詞節に後接した段階を考えた。

山本（二〇一一）では、形容詞の派生接辞「くラシイ」が、モダリテイ形式としての用法を獲得する史的变化を考察した。室町期初出の「くラシイ」は当初、名詞・形容動詞語幹から形容詞を派生したが、修飾語を伴う名詞句や事物を表す名詞節（準体句）への後接を経て、近代になって活用語に付く用法が定着する。

「ゲナ」としは比較される形式に「サウナソウダ」がある。「サウナ」も「ゲナ」同様、近世には終止連体形に後接して「推定」を表したが、近代以降その用法はなくなっている（岡部二〇一一等）。この種のモダリテイ形式の形成・存続は、連体形終止が一般化し、かつ、準体助詞「の」が未発達の時期でなければ難しいのではないかと思われる。今後の課題としたい。

注

① 文法カテゴリーのモダリテイは、他のカテゴリー、ヴォイスやテン

- ス・アスペクト等に比べても、論者・立場による捉え方、概念の差が大きい。本稿ではひとまず、モダリティを「文内容の現実との関わり」、モダリティ形式を「文内容が現実外であることを表す形式」と捉えておきたい(野村二〇〇三、参照)。今後、中世室町期の「マジイ・マイ」「サウナ」「ウス・ウスル」等の考察を通じて有用な定義を考えたい。
- ② 野村(二〇〇三)は、助詞「カ」は古代語・現代語を通じて殆ど述語形式に後接でき、不自然な「ラシイ」等がむしろ特殊だと指摘する。
- ③ 青木玲(一九八二)は、「枕草子」と「徒然草」を比較し、鎌倉期には接辞「ゲナリ」の生産性が落ちて使用度数も減っていると指摘する。
- ④ 「ゲニ候」は、抄物では殆ど漢字表記され、「候」の語形が当期に見られる「サウ」「ス」等のどれか確定できないため、便宜上、漢字表記する。
- ⑤ 「ゲニ候」の用例は清原宣賢講「毛詩抄」「蒙求抄」に、「ゲナ」は笑雲清三編「四河入海」に多い。宣賢や笑雲の関わった抄物は多く、稿者未見のものもあり、個人的な特徴か、時期によるか特定できていない。
- ⑥ 抄物の例では、解釈に有用な場合、原典〔注釈対象の漢籍〕の注釈対象箇所を〔抄物に引用されている部分〔原典から補足〕〕の形で示す。
- ⑦ ロドリゲス日本大文庫「Na(な)、又は、Nau(なる)」に終わる形容動詞の活用(土井訳 p.207, 8)でも、活用形のひとつとして挙げられ、「然し、に(Ni)に終る形に存在動詞を添へた言い方で、すべての時や法を補ったのが上品である」と説明される。
- ⑧ 調査した範囲の「アリエナ」の用例数(通読一度の調査による概数)は、杜詩統翠抄7例、史記桃源抄5例、四河入海47例、毛詩抄3例、蒙求抄1例、詩学大成抄1例、玉塵抄5例、の計69例。
- ⑨ 森田(一九八〇)、益岡(一九九一)。
- ⑩ 調査した範囲では、(一)は「史記桃源抄」や「毛詩抄」「蒙求抄」、

中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

- 「玉塵抄」に多く、(二)は漢詩の抄物「四河入海」「中華若木詩抄」等に多い。抄物間の「ゲナ」の用法差は複雑で、未だ整理しきれていない。語釈や用字・表現の説明が多いか、作品の解釈鑑賞が中心かという注釈態度のほか、成立時期、開書か編纂か抄かの差等を考慮して見直したい。
- ⑪ 「ゲナ」の研究の多くが〈伝聞〉の意味の発生を扱うのは、現在方言で、中国・四国や九州などで広く〈伝聞〉用法が認められるためである。
- ⑫ 先行研究は、「ゲナリ形容動詞の意味を、「客観性の強い状態の意味」(村田二〇〇五)、「対象の状態を描写する」(青木一九八二)と説明する。
- ⑬ 「能(語曲)」でも、「アリエゲニ候」が多用される。存在動詞と繫辞があり、殆どが終止用法という抄物と同じ様相を示す。使用は、「詞」といわれる散文部分に限られ、シテとワキとの問答に多い。
- ⑭ 大鹿(二〇〇四)で「潜勢状態」と呼ばれる。現代語の「ヨウダ」が表すモダリティの一つ(様態)、「話者が自らの感覚によって直接捉えた事態の様子を述べる」(岡部二〇一一)とは、疑問文にできる点で異なる(例「*雨が降るようか」)。
- ⑮ 青木(二〇〇七)は、連体形に後接することでテンスが分化でき、個別の事態の存否に関わる判断を表すようになったと考察する。しかし、この種のモダリティ形式は事態の存在を前提とした判断を表し、過去にある事態が存在したかどうかや、未だ存在しない事態の想定は表さない。
- ⑯ 村田(二〇〇五)によると、「形容動詞語幹+ゲナリ」の派生例は、平安期には「あはれげなり」「あたたかげなり」等、ごく僅かである。
- ⑰ 当期には他に、「不定げなり」(宇治拾遺物語)、「閑散げなり」・「存外げなり」・「大事げなり」(以上、古今著聞集)、「等閑げなり」(延慶本平家)、「徒然げなり」(百二十句本平家)といった語も見られる。
- ⑱ 「クツチゲナル程二」という一節は、梵舜本(江戸初期書写)のみ見え、諸本には見えないという(日本古典文学大系頭注)。したがって、

鎌倉期よりやや時代が下る可能性がある。

⑬「アル」「デアル・チャ」「よい」等で、「連用形・語幹＋ゲナリ」と「終止・連体形＋ゲナ」とで意味・用法に殆ど差がなく前者が残存するのは、これらの語彙的な意味によって「連用形・語幹＋ゲナリ」でも、抄物「ゲナ」に近い判断を表すことができるためと考えられる。

使用したテキスト※引用に際しては、私に句讀点を施し、漢字は概ね通行の字体に統一した。

○宇津保物語・源氏物語・梁塵秘抄・沙石集：新編日本古典文学全集（小学館） ○愚管抄・古今著聞集・平治物語・覚一本平家物語：日本古典文学大系（岩波書店） ○教訓抄：日本思想大系（岩波書店） ○塵袋：『印融自筆本重要文化財塵袋とその研究』（勉誠社） ○延慶本平家物語：北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文編』（勉誠社）
〈抄物〉○史記桃源抄・蒙求抄：抄物資料集成（清文堂出版） ○杜詩統翠抄・漢書列伝竺桃抄：統抄物資料集成（清文堂出版） ○毛詩抄：『林宗二林宗和自筆 毛詩抄』臨川書院 ○応永二十七年本論語抄・四河入海・玉塵抄：抄物大系（勉誠出版） ○邦訳日葡辞書：森田武他編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店） ○ロドリゲス日本大文典：土井忠生訳注『ロドリゲス日本大文典』（三省堂）

参考文献

青木博史（二〇〇二）「古代語における「句の包摂」について」『国語国文』71-7
青木博史（二〇〇七）「近代語における述部の構造変化と文法化」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房
青木伶子（一九八二）「随筆の語彙——徒然草——」『講座日本語の語彙』4

中世の語彙 明治書院

漆谷広樹（一九八八）「形容動詞」語幹構成要素の「ゲ」に関する一考察 『専修国文』42

大鹿薫久（一九九三）「だろろう」を述語にもつ文についての覚書き 『日本芸文研究』45-3

大鹿薫久（一九九五）「本体把握——「らしい」の説——」『宮地裕・宮地敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院

大鹿薫久（二〇〇四）「モグリテイを文法史的に見る」『朝倉日本語講座 6・文法Ⅱ』朝倉書店

奥田靖雄（一九八四・一九八五）「おしはかり（一）」「同（二）」『日本語学』3, 12, 4-2

岡部嘉幸（二〇一）「現代語からみた江戸語・江戸語からみた現代語——ヨウタの対照を中心に」金澤裕之、矢島正浩編『近世語研究のバースペクティブ——言語文化をどう捉えるか』笠間書院

金水敏（二〇一）「シリーズ日本語史3 文法史」岩波書店（第3章、統語論）

佐田智明（一九七二）「中世末期の「サウナ」について」『北九州大学開学二十五周年記念論文集』

進藤善治（一九七七）「接尾語「げ」の語義構成上の性質」『東海学園国語国文』11

仙波光明（一九七六）「終止連体形接続の「げな」と「さうな」——伝聞用法の発生から定着まで——」『佐伯博士喜寿記念国語学論集』表現社

坪井美樹（一九八一）「形容動詞活用語尾と断定の助動詞——歴史の変遷における相違の確認——」『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』大修館書店

- 土井忠生（一九三八）「近古の語法」『国語と国文学』15-10
- 野村剛史（二〇〇三）「モタリテイ形式の分類」『国語学』212
- 野田晴美（一九九七）『の（だ）の機能』くろしお出版
- 益岡隆志（一九九二）『モタリテイの文法』くろしお出版
- 村田菜穂子（二〇〇五）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院
- 森山卓郎（一九九二）「日本語における推量をめぐって」『言語研究』10
- 森田良行（一九八〇）『基礎日本語』2 角川書店
- 山田潔（二〇〇一）『玉塵抄の語法』清文堂出版
- 山田潔（二〇一〇）「抄物における助動詞「げな」の用法」『近代語研究』15
- 山本佐和子（二〇一〇）「ツベイ」と「ツベシイ」——助動詞「ベシ」のシク活用化について——『日本語の研究』8-1
- 山本佐和子（二〇一〇）「モタリテイ形式「ラシイ」の成立」『日本語文法史研究』1
- 湯沢幸吉郎（一九二九）『室町時代の言語研究』大岡山書店
- 〔付記〕 本稿は、二〇〇六年四月の京都府立大学大学院の授業での報告以来、二〇一二年度日本語学会秋季大会（二〇一二年一月四日、於富山大学）の口頭発表、二〇一八年度春季同志社大学国文学会（二〇一八年六月）の講演等で報告させて頂き、大幅な改訂を経てなつたものです。各席上で貴重な御意見を数多く賜りましたことに深く御礼申し上げます。